

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
第五福竜丸平和協会
〒136-0061 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

五十三年目の原爆忌が間近い。私にとっては、大学のゼミナールの調査実習ではじめて長崎の地を訪れてから、今年はずいぶん三十年目の夏になる。被爆者調査や運動をつうじて被爆者からさまざまなことを教えられてきた。被爆五十周年を迎えたころから、その一端を話す機会も増えてきて、ある平和学習会で「被爆者たちの戦後五十年」と題して話したときのこと、中国帰還者の元軍医の方がこう発言された。

「こうした集会で中国での加害の体験について発言すると、ここは原水爆禁止の集会だからと発言を遮られたこともありますが、きょうは加害(国の戦争責任)と被害を統一したお話を初めて聞きました。あなたはどのように勉強してこられたのですか」

私はそのとき、被爆者のねがい(「原爆被害者の基本要請」日本被爆協、一九八四年)と国の被爆者対策(「基本懇」意見から「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」に至る)を対置させながら、原爆被害に対する国家補償制度確立の意味を語ったのだ。そしてそれはもちろん、被爆者たちから学んできたことであつたのだ。

国の被爆者対策の基本は戦争犠牲性「受

国の戦争責任を問う思想

被爆者から学びつづけて

栗原 淑江

忍」論にもとづく国家補償の否定にある。

「およそ戦争という国の存亡をかけたの非常事態のもとにおいては、国民がその生命・身体・財産等について、その戦争によって何らかの犠牲を余儀なくされたとしても、それは、国をあげての戦争による「一般の犠牲」として、すべての国民がひとしく受忍しなければならぬところ……」(基本懇意見)

これに対して被爆者たちは、自らの原爆体験にもとづいて、核兵器を「人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許さない：絶対悪の兵器」として否定し、そのような反人間的な原爆被害をもたらした国の戦争責任を問う思想を築き上げてきたのだ。

戦後わが国では、ほとんどの戦争被害者が事実上その被害を「受忍」してきたなかで、被爆者たちは決してあきらめることなく、核兵器の廃絶を叫びつつ、原爆被害に対する国の責任を追究し補償要求を掲げ続けてきた。それは、原爆の被害が単に自分個人の苦しみであるだけでなく、「人間として絶対に受忍することできない」ものであつたからに違いない。それは「あの

日」水や助けを求める人々に応えることのできなかつた痛恨の思いにも裏打ちされている(被爆者の四人に一人は、あの日のでき事が「このころの傷」になつて残つたと回答している。「被爆者調査」一九八五年)。

ふたたび被爆者をつくらぬ」というのが、そのような原爆被害認識のうえに立つて核戦争の被害者にも加害者にもならないとする、被爆者たちの決意のあらわれだ。

しかしわが国の政府は、「唯一の被爆国」と言いながら、いまだに世界に伝える「原爆被害白書」をつくっていない。それどころか被害を説明する調査すらして来なかつた。

国の戦争責任を否定しながら、アメリカの「核の傘」のもとでその核政策に加担し、時と場合によっては核兵器の使用も辞さない核兵器容認の立場をとり続けている。

戦争犠牲性「受忍」論は、日米ガイドラインにもとづく有事立法が日程にのぼる今、私たち国民にとつてもにわかには現実味を帯びてきている。原爆被害への国家補償の実現は、国家の国民に対する戦争責任を制度化するという意味で、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうに決意し」た憲法の平和主義の実質化、わが国の民主主義確立の根幹ともいえる課題となっている。

(「自分史つうしんヒバクシャ」発行人)



「かけしコンサート」壁面には第五福竜丸のパネル

テーマは第五福竜丸

ビデオに朗読に創作ダンス

井上 みゆき

梅雨明け前とは思えないほどの猛暑の七月四日、コープとうきょう江東区組合員委員会主催「かけしコンサート」がティアラこうとうで開催されました。この「かけしコンサート」は、小さい子供のいる親は普通のコンサートに行くことはむずかしく、また、その子供たちにも生のコンサートを

楽しんでほしい、平和についても親子ともども何か考えをきっかけになれば……ということが始まりました。

今年で七回目となり、今までには広島・長崎・沖縄そして東京などの戦争体験文の朗読や、コンサートの方ではロック・バンドから盲目のピアニストや江東青少年吹奏楽団の演奏など幅広く取り上げられました。今回は、富士見会マンドリンクラブによる普段はなじみの薄いマンドリンオーケストラと、第五福竜丸のエンジンが引き上げられたことがきっかけでテーマは第五福竜丸と決まりました。といっても、第五福竜丸についてどんなふうにか最初は見当もつきませんでした。

当日は子供を含め一五〇名ほどの参加となりました。第五福竜丸展示館からたくさん写真や本物の灰、大漁旗など貴重な品々をお借りし会場に展示することが

できました。オープニングは第一回目から連続出演の女性コーラス、ソット・ポーチエの歌声が始まり、次にいよいよ第五福竜丸です。

まず、事実を知ってほしいので、テレビ放送のビデオを五分ほど上映し、武政博氏の詩集から「骨にもなれない骨」の朗読、そして創作ダンスでの表現です。常藤利恵子さんの振り付けで「コミュニケーション」の握手と題し平和や人間愛を表現したとても暖かく明るいものでした。休憩をはさみマンドリンの演奏では、映画音楽やクラシックなどいろいろなジャンルの曲が演奏され「クレヨンしんちゃん」の「オラは人気者」などもあり子供たちも楽しむことができました。

二時間のコンサートでしたが、「よかつた」という感想が聞こえてきてホツとしました。皆さんの心の中に少しでも平和・愛・音楽が残ればうれしいです。

(第七回かけしコンサート 実行委員長)

やらないで」と世界の国々に強く言いたいです」「この地球上に住む私達一人一人が「核実験を絶対行わない」という強い決意と「核廃絶」の運動を広めていけば核兵器をこの地球上からなくすることは可能だと思えます。核兵器をなくすことが人類の平和をもたらすことになるのだと確信しています。

久保山愛吉さんの死をむだにしないために私達は核兵器をつくらない世の中にしたいたいと思えます」と澄みきつた声で訴えた小学六年生。「日本は広島・長崎、そして焼津と三回も核の被害を受けています。核の恐ろしさを、そしてそれがどれだけ人を苦しめるのかを世界に訴え続けていくのは久保山愛吉さんの言葉を受け継いだ私たち日本人、そして焼津市民の使命です。さらに言えば、この二一世紀を生き抜いていく僕たち若者の使命でもあると思えます」「僕自身も平和を築き上げていく一人になりたいと思えます」という決意を述べた中学三年生。私は久保山愛吉さんの「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」という意志は、確実に焼津の子らに受け継がれているなと思つた。

(協会評議員)

都民の共同を一層幅広く成長させ、 確かなものを残した原爆展

室 喜代一

「つたえようヒロシマ・ナガサキ 東京原爆展」が、六月二十日から三十日にかけて品川区大崎の〇(オー)美術館でひらかれ、約三千人の観覧者が訪れました。特徴的なのは、多くの方が一時間二時間とじっくり時間をかけて、熱心に展示に見入っていたことで



第五福竜丸の写真もいくつか展示「東京原爆展」

す。寄せられた感想文は、観覧者の三分の一近くの八百五十九にものぼりました。とくに、被爆者の証言は多くの方に衝撃を与えたようで、「今回初めて被爆者の方のお話を聞かせて頂いたのですが、本当に恐ろしい出来事だったんだなあと思いましたが、うまく言葉で表現はできません」(男十九歳)などの感想が多数寄せられています。また、あらゆる被爆者の体験を聞きたいと、何回も足をこぶ方がいたことも印象的でした。

会場に訪れた方々はさまざまですが、近所の保育園、小学校からも参加していただけました。「私は、原水爆くは、こんなにすごいりよく有るとは、思っていませんでした。インドとパキスタンが、かく笑けんをしたのはなぜ? かく笑けん一つしただけでその周りの人が、白けつびようや、げんばくのびようきになったりする

のに……。私は前よりもっと戦争について調べたくまりました。夏休みの自由研究で「戦争」の事を調べるといふ九歳の女の子の感想文です。

今回の原爆展は、全般的なとりくみとしては久しくなかったもので、展示の内容・規模も充実したのになりました。会場には、広島・長崎両市から借りた大型の被爆写真パネル、手でさわられるものを含めた四十点をこえる被爆の遺品・現物資料、被爆者の描いた絵、そして日本被団協作成の「原爆と人間展」パネルなどを展示、第五福竜丸展示館保管のパネルと資料もお借りしました。こうしたことにより、「実物に触れることができたり、体験者の話を聞くことができ、より具体的に心に刻み込まれました」(女二十四歳)など、多くの人の心に訴えることができました。

これだけの企画をすすめることができたのは、被爆者の方々の熱意と、都民の幅広い賛同と協力が寄せられたことによるものです。「動けない私の代わりに役立てて」と健康管理手当のヶ月分を送金してくる被爆者の方など、多くの



(東京原水協事務局長)

団体、個人の核兵器廃絶への願いが結集され、これらに、運動、組織はもちろん、財政的にもしっかり支えられたことが、原爆展を成功させる最大の力となりました。実行委員会参加・賛同の団体は百五十をこえ、吉永小百合さんや黒柳徹子さんらをはじめ七百人をこえる個人の方々からも賛同していただきました。こうした運動のひろがりのもと、東京都、広島市、長崎市、毎日新聞社からの後援も受けました。

原爆展は、多くの観覧者に平和と核兵器廃絶への思いを伝えることに加え、都民の共同をいっそう幅広いものへと成長させました。インド、パキスタンの核実験と新たな核軍拡競争の危険、依然として核独占体制を維持しようとする核保有国、アメリカの核戦略に追随して核兵器廃絶に背をむける日本政府、こうした情勢を草の根の力できりひらいていくうえで、確かなものを残した原爆展のとりくみだったと思います。

インドとパキスタンの核実験と焼津

飯塚 利弘

一九九八年五月一日と二三日、インドが地下核実験を強行した。激しい憤りとともに頭に浮かんだのは久保山さんの顔だった。一九五七年末から五八年初頭にかけてエジプトのカイロで第一回アジア・アフリカ諸国人民連帯会議が開かれ、日本の母親代表として参加した久保山さんはネール夫人の強い要請でインドへ行き、インドの人々に核兵器廃絶・核戦争阻止を切々と訴え大きな感銘を与えたのだった。そのインドが核実験をやったと知ったら、すずさんはどんなにか悲しむだろうと思っただ。

「核実験による被ばく市民をもつ焼津市と世界の平和と安全を願う焼津市民の心を代表して、貴国が再び実施した地下核実験に対し断固抗議する」(5・14抗議文より) 焼津市長と市議会議長は連名で直ちに(5・12、5・14)インド首相に抗議文を送付し、焼津市原水協は駅頭で抗議の訴えを行った。

第五福竜丸展示館を出発した平和行進が五月一九日に静岡県入りした。五月二五日、久保山愛吉さんの墓前で決意を新たにした平和行進団は炎天下の焼津市内を行進しつつ市民に「子どもたちに孫たちに核兵器のない二一世紀を」と訴えた。市役所では長谷川市長が出迎え、インド核実験への抗議の報告を交えて行進団を激励した。

国際世論が求めた自制を無視してパキスタンが五月二八日、三〇日に核実験を行った。「核兵器の存在は人類への最大の脅威であり、核実験により戦略的・軍事的均衡を保とうとする考え方が大きくな誤りである」(5・29)、「核兵器は人類と共存できないものであるということをはげ理解できないのか」(6・1)パキスタン首相への焼津市の抗議文には強い憤りをもって道理を説く姿勢が見られた。六月八日、焼津市議会は議員全員の発議による「核兵器廃絶のため国際条約の実現を求める決議」

を議決した。五年前の一九九三年六月二八日に焼津市議会は統一平和行進の要請を受けて「核兵器の全面的な禁止国際協定締結を求める意見書」を全会一致で採択し政府へ提出した。これは静岡県下七五全自治体による「意見書」採択へ広がった。しかるに日本政府は国民の声を背向け被爆国の政府としての責任をなら果たそうとしていない。それでイ・パの核実験を機に再度の議決となったのだ。「意見書」を「決議」としたこと

に焼津市議会の強い意志が示されている。「決議」ではイ・パ核実験の抗議だけでなく、「包括的核実験禁止条約採択前に「駆け込み核実験」をした中国とフランス、条約の対象外として臨界前核実験を三回もやったアメリカなど核保有国こそが、ときびしく批判している。そして日本政府の責任・義務として被爆の実相を世界に知らせ、核実験全面禁止・核兵器廃絶国際条約締結に全力を尽くすことを強く求めている。六月九日、焼津市議会議長、副議長、焼津市長は総理府などを訪れ、首相と大蔵、外務、自治大臣に決議文を手渡し、核兵

器廃絶国際条約の実現を強く訴えた。第五福竜丸事件当時焼津中学三年生だった焼津の主婦は「焼津の核廃絶運動に応援を」という意見を静岡新聞に掲載した(6・13)。「二歩踏み込んだ焼津の決議がぜひ実現するよう第五福竜丸事件の市民として心から応援したい」と「反核一色だった」焼津中学生徒会当時を振り返りつつ力強く述べており、広く焼津市民の共感を呼んだ。

六月三〇日、第一四回第五福竜丸6・30市民集会在文化センター小ホールを満席にして開かれた。市長、議長の主催者挨拶はインド・パキスタン核実験への抗議や「決議」の処理など具体的な事実に基づいてとてもよかった。しかし会場の共感を呼んで最も盛り上がったのは市内小・中学生の平和の作文発表だった。「今回のインド・パキスタンの行った核実験や過去にも核兵器を開発するためにたくさん核実験を行ってきた大国は、久保山愛吉さんの気持ちと反したことをやったのだと私は思いました」「私は久保山さんに代って『核兵器をつくる核実験などを絶対(四めん下段へつづく)